

有機EL研究 深耕

ICEL2012
運営委員長
安達千波矢氏

有機エレクトロ・ルミネッセンス (EL) および有機エレクトロニクスに関する国際会議 (ICEL2012) が4日から6日までの3日間、福岡市東区のホテルThe LUIGANSで開かれる。そこで運営委員長である安達千波矢九州大学教授に会議の目的などについて聞いた。この中で安達教授は「今後の進むべき方向を議論することになる」とし、将来の研究や実用化に影響を与える会議になる可能性を示唆した。(西部・松本亮一)

国際会議 きょう開幕 実用課題を共有化



「今回の会議の目的は、有機ELはステージとして第3世代に入っている。そこで世界中の研究者が集まっ

て、今の有機ELの状況をきちんと理解しようという。次はどの方向にいくのか見極めて、価値観を共有して、問題点や課題などを理解

できればいいかなと思う。産業界の人も大学の人も、この方向にいきましようねという議論ができればいい」
第3世代有機ELに関する発表は安達先生のグループだけだとか。「会議では第3世代とはどのようなモノですよ」という発表をする。特性などの詳細はジャーナルに掲載するおりにしておき、今回は主に方向性を示すつもりだ。他の研究者は第2世代の今後の方

向性を示すことになるだろう」
大学の研究者の発表内容は、「プラスチックに電気を流すと光るわけだが、なぜ光るのかよく分からない部分がある。霧の中で歩いているような状況で、きちんと理解できれば次が見えてくる。きちんと理解して学問にしよう」という内容になると思う」

「企業の発表内容は、「実用化の視点で、どのレベルまで開発が進んでいるのか」といった内容になる。今後解決すべき課題なども明らかにするつもりだ」
「大学と企業の発表内容が大きく異なるようにですが、
「きちんと現象を理解できていないが、実際にモノを作るにはどのくらい進んでいる。学術的に説明できずとする流れがある。二つがいつしょになってやっていると、学術は珍しい。それだけ有機ELは実用化のスピードが速い」といって」